

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを
探る

「丑の呪い」

前回まで紹介してきた倉田家を襲う未曾有の因縁。この源流はどこにあったのか？それを紐解く一つの示唆として興味深い挿話があったのでご紹介したい。

それはお雑煮。正月のお雑煮というと、各家庭それぞれ先祖代々また地域の風習に倣って継承されている味やスタイルがあります。

最初にお雑煮の定義から。そもそもお雑煮をお正月に食べる意味として新年の豊作や家内安全の願いを込めてお供えたお餅と一緒にいただくことにある。そしてメインのお餅は、昔から日本人にとってお祝い事や特別の日に食べる「ハレ」の食べ物として珍重されてきたいきさつがある食材。そのため新年を迎えるにあたり、餅について他の産物とともに歳神様にお供えをする風習が一般的でした。そして元日にそのお供えのお下がりとしていたたけのお雑煮です。

では、倉田家のお雑煮はどんな中身だったのでしょうか。

最近京都の田中家のお雑煮事情を聞く機会がありました。倉田繁太郎の長女である倉田ゆきは、田中傳七に嫁ぎ、夫婦二人未開の土地 京都で京都十字屋を立ち上げました。その時に、倉田ゆきは、当然倉田家のお雑煮の味を田中家にも持ち込んでいました。京都といえば白みそのお雑煮というイメージもありますが、田中家においては倉田家のお雑煮をいまでも親しんでおります。

さて、気になる倉田家および田中家のお雑煮の中身はと聞いてみると、いちよう切りした大根を醤油で味付けた薄味のだし汁でよく煮込み、焼いたお餅を入れるシンプルなお雑煮です。ここまでは普通ですが、両家のお雑煮の特徴は、濃い醤油味で煮込んだ牛肉のしぐれ（すきやき風です）と一緒に食べることです。

通常はお雑煮がメインで付け合せに牛肉とくるところですが、当家では牛肉がメインで、お雑煮はいわゆるごはん（白飯）になります。すきやきを食べるときの白飯がお餅になったと想像



倉田家代々のお雑煮。イチヨウ切りした大根を煮込んだ汁にお餅。そして牛肉のしぐれがセットとなっている。

していただければわかりやすいでしょう。だし汁は、いたって薄味に仕上げているのは、しぐれがとても濃い味なので、それを薄めるために薄味にしています。時には牛肉をお餅にまいたり、大根と一緒に頬張ったりするのがお正月のお雑煮スタイルになっています。

(次号に続く)

株式会社十字屋 倉田恭伸

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

「丑の呪い」 続き

では、東京のお雑煮で牛肉を一緒に食べる風習があったのかというと、そんなお雑煮を正月に出しているところはないとの話になったのです。伝統的なお雑煮において牛肉が出されることを考えると、これは倉田繁太郎発祥の倉田家の味となったことがうかがえます。

繁太郎は牛肉を食べることが大好きで、何かとすきやきを食していたという記録があります。これは十字屋の創業者である原胤昭、戸田欣堂も好んで食べていたというので、その影響を多く受けたと思われる。明治六年の耶穌教解禁を機に、食の西洋化も進み、一部で牛肉を食べる文化が芽生えた時代でした。特に銀座十字屋は、築地の外国人居留地とのつながりも深かったため、牛肉を食す機会が大変に多かったといえます。もちろん、当時はとても高価な食材でもあったので、そうやすやすと食べられるものではなかったのも事実です。

しかし、お正月のお雑煮の意義を今一度振り返ってみても、牛肉を率先し

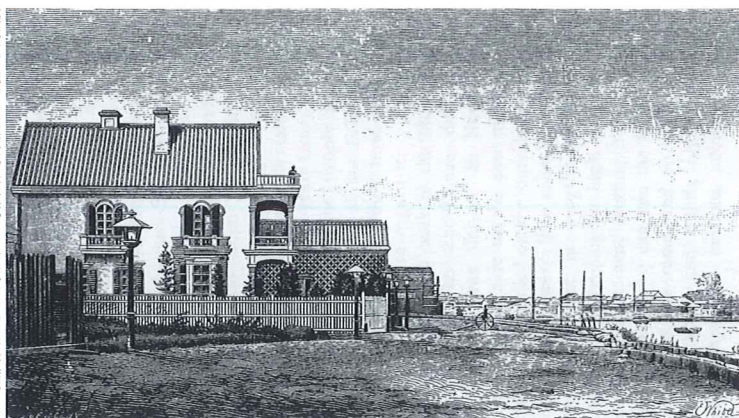
て食す文化は日本にはなかったのです。そもそも牛肉を食べること自体なかったのですから。それを文明開化の名の元に、そして、多くの宣教師と交流を重ねていく中で牛肉に魅せられた倉田繁太郎は、お雑煮に牛肉文化を取り入れてしまいました。お供えモノのお下がりをいただくというならわしに對して、何とも不謹慎にも思える行動でした。反面、新年を無事に迎えることができた感謝の意味も込めて、当時高価であった牛肉をふるまったという面もあったと思います。今となってはその真意を確かめることはできません。しかし、この牛肉を食べることが、彼以降の女系因縁につながったと想像できるのです。

牛は干支という丑。旧暦で丑が鎮座する季節は立春、その象意として、男や一族、世襲相続といった世代をつなぐ場所を表していました。この丑を好んで食すということは、自ら子孫を剋すという意味にもとれるのです。繁太郎の牛肉への傾倒が、その後の倉田家

男子を剋す暗示となって現実化したとみてとれるのではないのでしょうか？

(次号に続く)

株式会社十字屋 倉田恭伸



築地居留地のA六番館。繁太郎とも交流のあった宣教師ジュリア・カロソルスが設立した女学校（現・女子学院）があった。

出典：女子学院資料室

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

「銀座十字屋の源流」

本年一月七日に、社名を株式会社十字屋から株式会社銀座十字屋に変更いたしました。創業から変わらない商号で続けてまいりましたが、従来の屋号であった銀座十字屋を商号にすることにいたしました。そして、来年は、いよいよ百四十周年を迎えることとなります。明治、大正、昭和、平成という時代を乗り越え、次の時代に向けた新たな創業の志と気概を持って臨む決意の表れとして社名の変更にいたしました。

今号で三十三回目の本稿となりますが、ここで、創業前の銀座十字屋の源流について少しご紹介させていただければと思っております。弊社は明治七年の創業ではありますが、少し前、明治二年に遡って原稿を進めていきたいと思えます。

クリストファー・キャロザース (Christopher Carothers)。この連載の初稿にも登場した人物です。日本では様々な呼称があるようで「カロゾルス」「カラゾルス」「カルゾルス」「カロザース」「カローザース」などなど。明治初期の時代、日本では全くと言っていいほど英語は普及していませんでしたから、発音のとらえ方も人それぞれで

あったことが表れています。

本稿では現代風に改めて彼の呼称をキャロザースとして定義してみました。キャロザースは明治二年(1869年)に米国長老教会の宣教師の一人として夫人ジュリアと共に横浜に来航しました。まだ、日本では切支丹禁制の高札が残っていた時代でしたので、おそらく公式の来日目的は英語教師の身分として入国したと考えられます。

横浜でしばらく滞在した後、同年八月に築地の外国人居留地に移転しました。築地での彼の特命は、東京での在日ミッションの拠点づくりでした。しかし、築地での最初の仕事は、自身の居を構えることに費やされ、翌明治三年に隅田川に面した築地居留地6番にA6番館という洋館を建設し布教活動の拠点が完成しました。(前号の写真を参照ください)この洋館は後に女学校となり現在の女子学院に通じています。

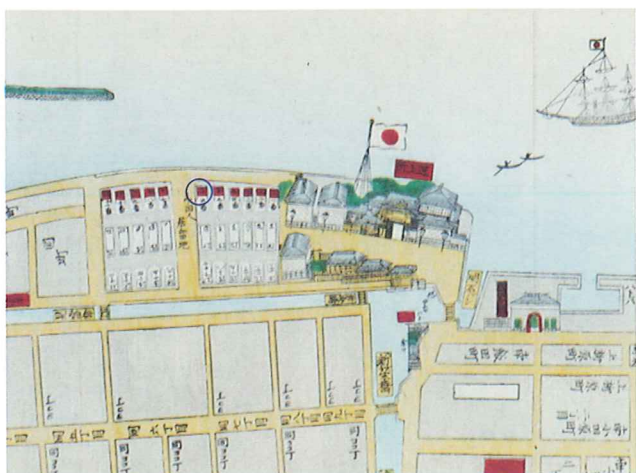
そして、銀座十字屋を創業した面々は、皆このキャロザースのいる築地居留地で学び洗礼を受けた弟子たちでした。余談ではありますが、音楽取調掛の伊沢修二も

明治二年にキャロザースの英語塾で学んだという文献もあり、日本の西洋音楽の源流を垣間見ることが出来ます。

銀座十字屋の原点も、このキャロザースに起因することが多く、次号日本でのキリスト教史ではあまり日の目を見なかつたキャロザースの人物像に迫ります。

(次号に続く)

株式会社銀座十字屋 倉田恭伸



A6番地(○の箇所)は、隅田川に面したウォーターフロントにありました。
東京府築地鉄炮洲居留地中絵図(1870)中央区立郷土天文館タイムドーム明石所蔵

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

「キャロザースの人物像」

キャロザースは、当時の宣教師の仲間の中でも、ひと際変わり者で、協調性というものを持ちあわせていなかったようだ。そのエピソードとして太田愛人著『開化の築地民権の銀座』に挿話があったので引用をしながら紹介したい。

日本でのキリスト教の呼び名は江戸時代を通じて「耶穌」であった。これは一五〇〇年代、中国にカトリック教徒によってキリスト教が伝えられた時、できる限り本来の発音に近いよう「イエス」の名を言い表すために音声学的な文字を採用した。当時の北京語で耶穌は「I e s u イエス」と発音されていた。その漢字が日本に伝えられた際、日本の読み方、発音として「ヤソ」で広まったというのがルーツになっている。米国家長老会をはじめ各流派の教職は、まず正しい発音のイエスが真の信仰に通じることとし、日本でのイエスの呼び方を改める必要性を共通の認識としていた。

その風潮の最中、キャロザースは何を思ったかこの「ヤソ」という呼び名を支持

したのだ。日本人に馴染んでいる名称を敢えて変える必要性を感じなかったからだ。さらに、キャロザースの意固地さは、万人の想像を超えた領域にあった。なんと、ヤソの名称の採め事から、宣教師を辞任する事態にまで発展することである。その後は英語教師という職で日本を転々とするに至るのだ。明治九年のことである。

このエピソードは、銀座十字屋の創業時の屋号にも大きな影響を与えている。明治七年創業時の屋号は「耶穌教書肆十字屋」であった。明治六年にキリスト教解禁を受け翌年に創業した十字屋の屋号に耶穌が使われたことは、キャロザースの影響を大きく受けたことがうかがえる。

一度思い込んだらとことんまで。そんな性格が表れているが、このことに起因して日本のキリスト教史ではあまり取り上げられてこなかった事実も垣間見える。

また、キャロザースの一番弟子であり銀座十字屋の創業者である原胤昭は、自身の師匠についてこう語っている。

「野蛮で武骨な人物。顔は猿に似て、学力もおぼつかない。信仰もいかほどのものであったか、今思えば分からない。ただ、剛情と熱誠頑健であった。人に感服することのできない人格者であった。」と記述している。

この異端の宣教師の教えを受け、十字屋を創業したメンバーは、激動の明治という時代を駆け巡ることになるのだ。

(次号に続く)

株式会社銀座十字屋 倉田恭伸



晩年のクリストファー・キャロザース
(Christopher Carrothers)

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

「秘密結社 十字屋」

反骨の宣教師キャロザースから洗礼を受けた原胤昭らは、長老主義の教義を学びながらも教会的な思想で活動をするのではなく、それぞれが信じる道を歩み始めることになった。明治初期のキリスト教の本流は横浜にあり、第一長老教会がその権威であった。より教会的な思想で布教活動を行っていた中で、築地は、中央政府との接点も多かったこともあり、よりナショナルリズム（国家的）に傾倒し、政治性と宗教性の混在が表面化していた。この環境は、十字屋創立に関わったメンバーにも大きな影響を与えることになった。

前号でも紹介したキャロザースのミッシェン脱退に際し、新たに日本独立教会を設立することになった。長老には原胤昭、戸田欽堂、執事に鈴木舎定らが名を連ねた。そして、拠点は、明治七年一月京橋銀座三丁目に開設された幸福安全社（愛国公党）に置かれた。幸福安全社は、土佐藩出身の板垣退助、後藤象二郎らが

主導する民権思想の拠点として設立された自由民権を謳う結社であり、その場所を間借りしての教会設立であった。

社屋の一階では、自由党の面々が民選議員開設のため、仮想国会組織をつくり喧々譁々の議論をしている一方、二階ではキリスト教の集會が催されていた。さらにこの教会が先進的であったのは、明治六大教育家の一人であった中村正直を説教者として招いたことだ。ちなみに六人の教育家の内、クリスチャンの教育家は三人おり、一人が中村正直で、ほか森有礼と新島襄であった。ここ銀座三丁目は、文化、文明、国家、宗教の思想が互いに交わり新しい時代に向けて蠢動しはじめる場所でもあった。

明治新政府にとって、銀座三丁目は自由民権の拠点であり物騒な場所であったであろう。その中で、十字屋は同じくキャロザースに洗礼を受けた田村直臣が、原の指導のもと新事業として手掛けた出版

事業、図書販売に注力していた。表向きにはであるが…。反面、自由党員の支援や擁護、地方から上京してくるクリスチャンの宿泊場所の提供など、社会事業としての側面も色濃く持つようになっていった。書店という顔をもちつつ、裏では秘密結社として反官、対国家、反薩長閥志向として銀座で暗躍していたのだ。

(次号に続く)

株式会社銀座十字屋 倉田恭伸



岸田劉生『田村直臣七十歳記念之像』（1927）
原胤昭と僚友。教師で日本基督教団巣鴨教会の設立者。

銀座十字屋創業の顛末

西洋音楽のルーツを探る

「創業者の離脱」

明治十五年。原胤昭は政府の言論封鎖に對抗するべく田母野秀頭像の風刺画を発売した。これが当局の忌諱に触れ、発禁の処分を受けることになるのだが、発禁処分は、義憤したキャロザースの門下である原は、須田町でこの風刺画を無料で配布しはじめたのであった。これが原因で、石川島の監獄に入獄するはめになるのだ。十字屋を創業し、足かけ八年が経ち、キリスト教の布教、女子教育、反政府としての民権運動に傾倒していた原であったが、とうとう罪人としての前科を課せられることになった。

しかし、この監獄での経験がのちの監獄改良と免囚事業のきっかけとなるのだが…。

当時の石川島の監獄の状況は、近くの銀座が文明開化を謳歌している傍らで、旧世界の状態が続いていた。幕府時代の名残りで牢名主が権力を握り、罪人とされた人々への虐待は日常茶飯事であった。獄中環境は過酷で、虐待だけでなく伝染病の蔓延で生きて出獄も危ぶまれるほどであった。また、当時の囚人たちの多くは政治犯として

いわれない罪を着せられた者がほとんどであった。過酷な取り調べ、劣悪な環境は、囚人となった者たちから希望や正義の志を剥ぎ取り、生きて出所したとしても、生きる屍となつて社会生活を営めないほど体力と精神を犯されていた。

その中に、原は収監されたのである。わずか三ヶ月の刑期ではあったが、過酷な環境下にいた原は、出獄後健康を取り戻すのに数か月を要した。監獄での経験は、原にとって天命との出会いとなり、出獄者の保護や支援を請け負う社会事業を立ち上げることになったのだ。

原が当局に収監される前、十字屋の創業者としての地位でいると、その害は十字屋にも及ぶことは明らかであった。原の思想を理解している同志や従業員は廃業も厭わない気持ちでいたに違いない。しかし、ここで根を絶やすことは避けなければならぬと憂慮した原は十字屋の担い手として、急遽、倉田繁太郎に経営全般を譲渡したのである。そして、個人としての身分で入獄したのである。人選としては洗礼を共に受けた

仲間、戸田欽堂や田村直臣などへ本来であれば託すべきことであったが、十字屋の創業に関わった者たちはことごとく偏屈で変わり者が多く、経営を任せることも、任せられることも互いに望まなかった。当時店舗を取りしきっていた倉田に任せるのが自然の流れであると継承されたのである。

入獄による風評被害を恐れ、自ら十字屋を離れる決断をした原のお蔭で十字屋に当局の検閲が入ることはなかったようだ。こうして十字屋の最初の危機は、原の離脱で回避することができたのであった。

(終了)

株式会社銀座十字屋 倉田恭伸



田母野秀頭